ティールーム

「地域屋」とデータベース

柳町（やなぎまち）　功（いさお）
（総合政策学部教授）

大学院修士の時代から韓国財閥研究を始め，かれこれ30年近くになる。1980年代の中頃，新興工業国として脚光を浴びていた韓国経済を，企業経営の視点，つまり財閥の発展として考察してみようと思ったのがきっかけである。しかしその当時，本格的に韓国財閥を扱った先行研究は日本国内には乏しく，「未開拓の領域」という表現が当てはまる有様であった。

それゆえ一方で韓国語自体の勉強を行いつつ，同時並行して資料集めに汗をかく日々であった。そんなある日，いつものように当時市ヶ谷にあったアジア経済研究所の図書館でのこと――，「面白いものを読んでいらっしゃいますね」と声をかけられたのである。声の主は研究所の幹部であり韓国経済の専門家H先生で，もちろん論文を読んだことしかない「雲の上」の先生であった。地域研究を行うアジ研の図書館には当該言語のナマの資料が豊富に所蔵されており，雑誌や新聞が伝える内容は貴重な情報源であった。私は日本でいう文芸春秋のような雑誌の中の財閥関係の論文をコピーし辞書を片手に一生懸命読んでいたのが，それがH先生の目に止まったのだ。この時の出会いによって私には「もう一人の指導教授」が誕生した。アジ研を含む国内外の研究者人脈を紹介して下さり，ますます韓国に深入りしてしまうことになった。

アジ研から受けた影響は計り知れないが，韓国財閥研究は「地域研究」として私の中で位置づけられている。その地域を丸ごと理解する――そのためには，その地域の言語，歴史，社会，政治，経済，文化などを幅広く学ぶことが私の基本姿勢となっている。その目指すところは現地の目線に立って財閥問題を考察するところであり，クオリティの高い情報をどれだけ多く持っているかが「地域屋」としての競争力を構成していた。長期休みの時はしばしば韓国に出かけ，あちこちで文献をコピーし，そうした紙類を大量に持ち帰るのがいつものパターンであった。足で探した資料は確かに貴重なものではあったが，インターネットなどのない当時，この資料を持っているか否かが研究者としての決定的な差となるようなところがあったと思う。

大学院博士課程の時代には延世大に留学し，交換留学1年＋私費留学1年の合計2年をソウルで過ごした。言葉の勉強をし，様々な資料集めに汗をかいたのは言うまでもない。そして語学力のピークを迎えた帰国前の2か月くらいであったであろうか，もっぱら関係者にインタビューをし続けた。文字にはなっていないナマの情報がそこにはあった。「地域屋」を目指す自分にとって非常に充実した時期であった。

今でこそ韓国留学は珍しくはなくなった。しかし1980年代当時，現地で知り合った留学生は企業派遣の語学研修が主たる目的で，大学院への正規留学はほとんどいなかった。民主化宣言（1987年）のころのハードな時代を生活体験として知っている私としては，日本のみならず韓国の学生たちにも当時の話を語ることが多い。彼らのほとんどは当時を直接経験しておらず，全く知らないからである。「当時の厳しい状況があったからこそ，現在の豊かさが実現できている」――こうした話を，若い学生たちに具体的に語る意味は大きいと思う。

高速インターネットが研究インフラストラクチャーとして当たり前の条件となった現在，ほとんどの文献はネット上で入手できるようになった。論文や雑誌・新聞記事などは，メディアセンター保有の強力なデータベースによってほとんど不自由なく入手できるようになった。文献コピーのためにわざわざ韓国に出張する必要はなくなった。データベース自体膨大な情報の塊であるため，遠い過去にまで遡って検索することで相当な分量の情報までも入手できるようになったからである。全くもって感動である。しかし「地域屋」にとって，文献には表れないナマの情報が不可欠なのは言うまでもない。生々しい情報を求めてのフィールドワークは「地域屋」本来の姿だからである。データベースの存在に感謝しつつ，節約できた時間を現地でのフィールドワークに移し，結果としての高いパフォーマンスを実現していくこと――これが「地域屋」の当面の目標であろう。